

昭和戦前期報知新聞附録集成 (全6回配本)

# 婦人子供報知

復刻版 (全2回配本)



雑誌王・野間清治が創刊した、  
女性・児童向けの新聞附録を完全復刻！



### 【本資料の特色】

- ◎1931年から1937年にかけて発行された報知新聞附録『婦人子供報知』全143号を全2回にわたって復刻。1930年代大衆文化の研究に新境地が拓かれる。
- ◎報知新聞社史関連資料が充実。報知新聞社史の空白を埋め、戦前期日本のメディア状況を精査するうえでも貴重な資料。
- ◎報知新聞の部数拡張のために創刊され、日曜附録合戦の口火を切った附録雑誌。「キング」化する報知新聞を象徴する雑誌として、『日曜報知』とともに今後のメディア史研究には不可欠となる。
- ◎現代小説、時代小説の二大連載を中心に、探偵小説やユーモア小説、実用知識、娯楽欄など、幅広いジャンルにわたり当代随一の著名人が多数寄稿。昭和戦前期における文学や漫画の最前線に触れることができる。
- ◎第5回配本の別冊にて第一人者による解説を、第6回配本の別冊にて『婦人子供報知』総目次を掲載する。

【解題】 佐藤卓己 (京都大学大学院教育学研究科教授)

【体裁】 B5判上製・総6058頁・全12巻

【定価】 各揃 (本体210,000円+税)

※各回とも分売不可

第5回配本 ISBN978-4-7601-5132-5

第6回配本 ISBN978-4-7601-5139-4

## 柏書房

〒113-0033 東京都文京区本郷 2-15-13  
Tel.03-3830-1891 Fax.03-3830-5337  
URL <http://www.kashiwashobo.co.jp>  
E-mail [eigy@kashiwashobo.co.jp](mailto:eigy@kashiwashobo.co.jp)



本資料集成を推薦します  
(50音順・敬称略)

1930年代社会・  
文化の無二の資料  
有山輝雄 (メディア史研究者)

人びとの習慣に変わりを  
加えた一週間ごとの定期便  
紅野謙介 (日本大学文理学部教授)

戦時期の大衆心理の実像を  
掘り起こす  
竹内洋 (関西大学東京センター長)

### 昭和戦前期報知新聞附録集成

第1回配本『日曜報知』	第1号～第82号 (1930年7月27日～1931年12月20日)	(全7巻)
第2回配本『日曜報知』	第83号～第135号 (1932年1月1日～1932年12月25日)	(全4巻)
第3回配本『日曜報知』	第136号～第185号 (1933年1月1日～1933年12月17日)	(全4巻)
第4回配本『日曜報知』	第186号～第262号 (1934年1月1日～1937年2月21日)	(全7巻)
第5回配本『婦人子供報知』	第1号～第67号 (1931年3月11日～1933年12月24日) 【2019年4月刊行予定】	(全6巻)
第6回配本『婦人子供報知』	第68号～第143号 (1934年1月14日～1937年2月28日) 【2019年10月刊行予定】	(全6巻)

おすすめします

メディア史、社会学、女性学、児童研究、文学研究、近代史、  
教育史、大学図書館・公共図書館

## 『日曜報知』

復刻版 (全4回配本)

【解題】 佐藤卓己 (京都大学大学院教育学研究科教授)

【体裁】 B5判上製・総11750頁・全22巻

【定価】 各回揃本体 (210,000円+税) ※各回とも分売不可

第1回配本 ISBN978-4-7601-4799-1

第2回配本 ISBN978-4-7601-4846-2

第3回配本 ISBN978-4-7601-4851-6

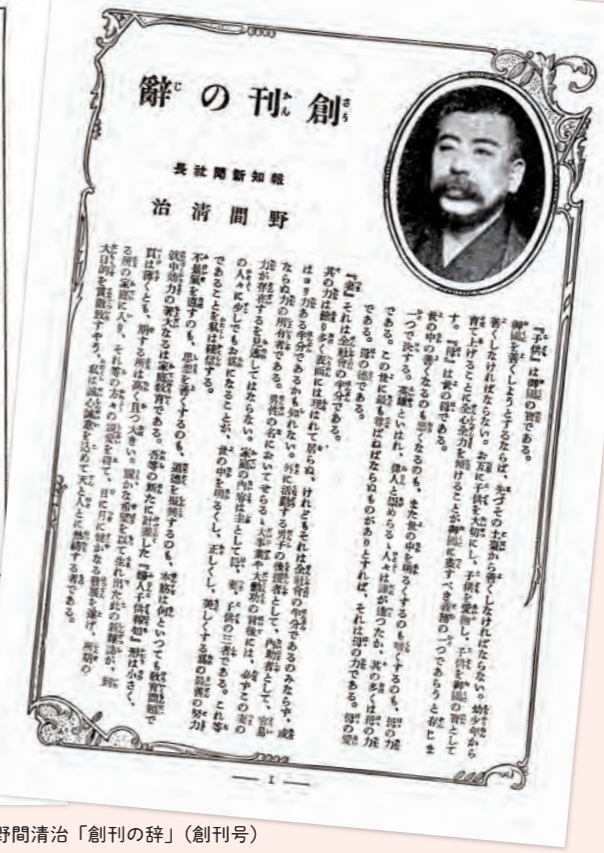
第4回配本 ISBN978-4-7601-4856-1



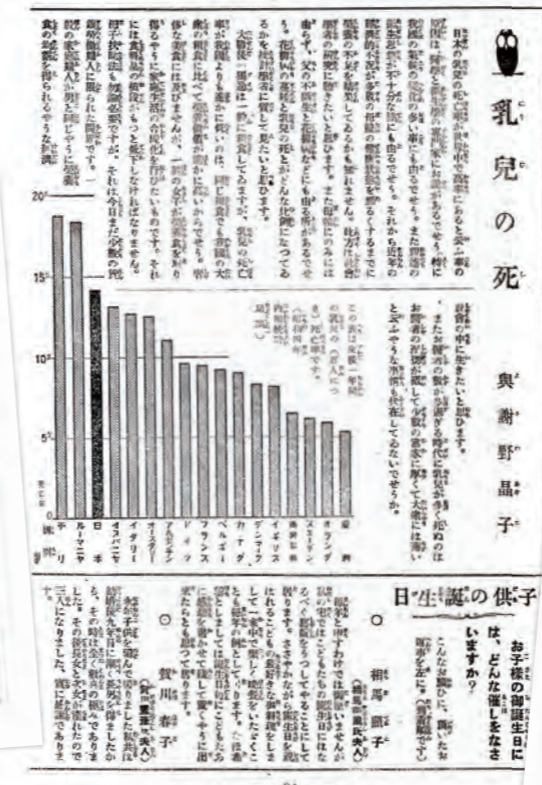
野間清治が創刊した報知新聞付録『日曜報知』は1930 (昭和5)年7月創刊、1937年まで全262号が発行された。当初週刊であったが、1933年8月以降は第1、第3日曜日の発行となり、以後『婦人子供報知』と交互に毎週日曜日に発行された。

吉屋信子、白井喬二、恩地孝四郎、木村莊八、岡本綺堂、横溝正史、直木三十五、巖谷小波、西條八十、佐佐木信綱、菊池寛、野口雨情、徳川夢声、長谷川伸、宮尾しげを、清沢洌、子母澤寛、村松梢風、サトウ・ハチローら当代一流の執筆陣が寄稿した。

# 満洲事変から日中戦争へと向かう 非常時日本の家庭的日常を映す 「講談社文化」研究の第一級資料



野間清治「創刊の辞」(創刊号)



与謝野晶子「乳児の死」(創刊号)



村岡花子「わにとキヤラメル」(第4号、1931年4月22日)

大正から昭和にかけては、マスメディアの形成が飛躍的に進んだ時期であった。当時、報知新聞社の社長だった野間清治は、定期購読者を定着させるためのツールとして、主婦や子ども向けの別冊家庭雑誌の創刊を企図した。それこそが、報知新聞の附録として発行された『日曜報知』『婦人子供報知』の2誌である。

このたび復刻する『婦人子供報知』は、1931(昭和6)年3月創刊、第2・第4日曜日の隔週で、1937年2月まで全143号が発行された。

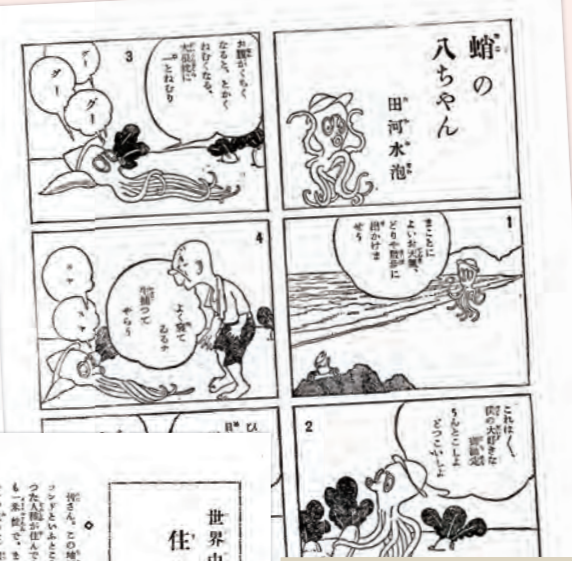
『婦人子供報知』には、横溝正史の探偵小説「笑ふ紳士」や田河水泡「蛸の八ちゃん」、北原白秋「煙幕」、野口雨情「赤とんぼ」、「サトウ・ハチロー」「一二三物語」宇野浩二「乞食と袋」海野十三「目をゴマかす犯罪」、金子光晴「慈愛のバイオリン」といった連載が見られるほか、与謝野晶子、佐々木信綱、西條八十、村岡花子、巖谷小波、武者小路実篤、豊島与志雄、宇野浩二、浜田広介、鶴見祐輔、宮原晃一郎、長谷川時雨、鳩山一郎、荒木貞夫、賀川豊彦、今井兼次、高村光雲、川端康成、吉岡弥生、本多清六、芦田均、堀口九萬一、中河幹子ら著名人が多数寄稿している。

わが国のマスメディア史、文学史をたどる上で不可欠の資料であり、学生から研究者まで、多方面で活用が可能な研究リソースとなる。

川端康成「九官鳥の話」(第72号、1934年2月25日)

サトウ・ハチロー「一二三物語」(第21号、1932年1月13日)

田河水泡「蛸の八ちゃん」(第8号、1931年6月24日)



横溝正史「笑ふ紳士」(第7号、1931年6月10日)

鶴見祐輔「職務のために死ぬ心」(第45号、1933年1月25日)

『婦人子供報知』復刻版の全巻構成

〈第5回配本〉	第1巻 第1号～第8号 (1931年3月11日～6月24日)
	第2巻 第9号～第20号 (1931年7月8日～12月23日)
	第3巻 第21号～第32号 (1932年1月13日～6月22日)
	第4巻 第33号～第43号 (1932年7月13日～12月14日)
	第5巻 第44号～第55号 (1933年1月11日～6月28日)
	第6巻 第56号～第67号 (1933年7月12日～12月24日)
〈第6回配本〉	第7巻 第68号～第79号 (1934年1月14日～6月24日)
	第8巻 第80号～第91号 (1934年7月8日～12月23日)
	第9巻 第92号～第103号 (1935年1月13日～6月23日)
	第10巻 第104号～第115号 (1935年7月14日～12月22日)
	第11巻 第116号～第127号 (1936年1月12日～6月28日)
	第12巻 第128号～第143号 (1936年7月12日～1937年2月28日)

報知新聞史の空白を埋めるとともに、  
1930年代の大衆文化、  
メディア史研究に新境地を拓く

川村みのる「女学校めぐり(一) 山脇高女の巻」(第61号、1933年9月27日)

金子光晴「世界中で一番寒い国に住んでゐる子供たち」(第67号、1933年12月24日)